

# 手

# 嶋

# 龍

グローバルスタンダードなんて、しょせん勝者アメリカの論理にすぎない——。

眞の「インテリジェンス」を  
制する者が  
世界を制す！

NHKワシントン支局長だった8年間を通して、人は一度も、他人の取材した記事を読むことがなかつた。

この人が語ることは、すべて彼がその目と耳で確かめたことだつた。  
NHKという巨大組織にあっても、無人の荒野を行くがごとく、  
一人のジャーナリストであることを貫き通した彼が、昨年突如退職した。  
そして今年再び人前に姿を現した時、彼は畏るべき啓示の書を抱えていた——。

Text by Takuji Ishikawa. Photograph by Hisashi Inukai.



# 手

# 嶋

# 龍

グローバルスタンダードなんて、しょせん勝者アメリカの論理にすぎない——。

眞の「インテリジェンス」を  
制する者が  
世界を制す！

NHKワシントン支局長だった8年間を通して、人は一度も、他人の取材した記事を読むことがなかつた。

この人が語ることは、すべて彼がその目と耳で確かめたことだつた。  
NHKという巨大組織にあっても、無人の荒野を行くがごとく、  
一人のジャーナリストであることを貫き通した彼が、昨年突如退職した。  
そして今年再び人前に姿を現した時、彼は畏るべき啓示の書を抱えていた——。

Text by Takuji Ishikawa. Photograph by Hisashi Inukai.





世界の政治の裏側で暗躍する秘密諜報部員が、この世界に実在することはもちろん知っている。

けれど、正直言つて、スパイなんて現実社会とは無関係だと思つていた。それは、イアン・フレミングが創造したジェームズ・ボンドのせいばかりではない。

元英國諜報部員のジョン・ル・カレが、自らの経験を駆使して書いた、一連のリアルなスパイ小説にさえ、興奮はしても、現実感を揺さぶられることはなかつた。諜報活動などといふものは、つまり大人のお伽話であつて、真実か否かは別として、それは、日本列島に暮らす人間にとっては、あくまで、対岸の火事だつた。

家の近所の海岸を歩いていた少女が、外国の工作員に拉致されるなどということが、現実に起きていたにもかかわらず、である。

はつきり言つて、お目出度い。けれど、当事者にでもならない限り、それが平均的な日本人の感覺というものだろう。

その日本人的な現実感を、根底から搖さぶる、優れたインテリジエンス小説が出版された。

その作品の名を『ウルトラ・ダラー』と言う。初版の発行は今年3月1日、実際に都内の書店に並んだのは2月27日らしいが、その1日と4分の1日の間に、売れ切れ店が続出した。当然と言えば当然なのだが、ことに新潟県での売れ行きが凄まじい。『現実感』の違ひが、その原因であることは、言うまでもない。

この処女作で、日本のミステリーワールドに華々しくデビューしたのが、人、手嶋龍一である。

その顔に、見覚えのある読者も少なくないはずだ。なにしろ彼はNHKの前ワシントン支局長。2001年9月11日の同時多発テロ事件のとき、11日間にわたつて24時間連続の中継を担当し、日本中にアメリカとブッシュ政権の動きを伝えたのは彼だつた。

『ウルトラ・ダラー』という小説の冒頭は、いくつかの奇妙な事件から幕を開ける。

1968年に、荒川区で起きた精密印刷技術者の失踪事件。88年タングルウッドに近い小さな街でのパルプ原料の盗難事件。89年に

ローランヌの超高級印刷機械メーカーであつたあるトランブル。さらには90年のコベンハーゲンで、日本人の美術ハイテク印刷所の経営者が忽然と消息を絶つた事件。時間的にも隔たりのある、一見すると互いに無関係な事件が作品を読み進むうちに焦点を結び、そこにひとつ驚くべき真相が、次々と現れる仕掛けになつていて。北朝鮮で、極めて精巧な、といふより実質的には本物と見分けがつけられない水準の、100ドル札が偽造されているのだ——。舞台は東京。この偽造紙幣を巡る国際間の駆け引きに巻き込まれる主人公は、BBC東京特派員にして英國秘密情報部員のスティーブン・ブラッドレー。と、書くと、なにやら007のコードネームを持つ、ブラッドレーの荒唐無稽な大先輩の得意とする冒險活劇を想像させてしまうかもしれないけれど、それは違う。

なにしろ、この作品が注目されているのは、それを構成するパートのリアルさなのだ。小説の仮面を被つてはいるが、限りなくノンフィクションに近いドキュメンタリー作品だと指摘する国内外の専門家も少なくない。

手嶋はかつて、NHKのワシントン特派員だった時代に、ノンフィクションを2つ書いていた。冷戦の終焉期に噴出した日米間の深い亀裂を描いた『ニッポンFSX』を撃て』と、湾岸戦争時の日本外交の愕然とする迷走ぶりを描いた『一九九一年 日本の敗北』だ。

日本同盟の変質を冷徹に描いた

書が、アメリカの政府や情報機関の関係者の間に回るほどの評価を受け、彼はハーバード大学の国際問題研究所にシニア・フェローとして招聘を受けている。『ウルトラ・ダラー』も、すでにその私的な翻訳書が、ワシントンで密かに読まれているらしいのだ。

## 日本に注がれる世界の情報関係者の視点。

「日本でスパイ小説を書き、市場に参入しようとすれば、市場に受け入れられるために、主人公を日本人にしがちです。そういうタイプの作品は少くない。でも、僕はそうする必要を少しも感じなかった。なぜなら、東京は実際にスパイという名のグローバルビジネスでは、かなり主要な基地になつていて。その事実をありのままに書けばいいと僕は思った」

六本木にあるノーランファームの東京オフィスの一室で、手嶋はそう話し始めた。ノーランファームというのは、競馬ファンなら知らぬ者のいない、アラブの億万長者たちの間でも有名な、競走馬の生産牧場だ。彼がそのオフィスにいる理由については、後に語ることにしよう。

「スパイ小説の素材として、日本はまさにジパング、黄金の国なのです。なにしろ、まだ、誰も手をつけっていない未開の地だから。経済大国は必然的に、情報大国たりうると言つたのは、外務省のラス・オフィサーと呼ぶべき優れた外交官は、80年代くらいまでは日本にも存在していましたが、組織ですが、僕も彼の意見に賛成です。

この2つの作品は、私家版の翻訳書が、アメリカの政府や情報機関の関係者の間に回るほどの評価を受け、彼はハーバード大学の国際問題研究所にシニア・フェローとして招聘を受けている。『ウルトラ・ダラー』も、すでにその私的な翻訳書が、ワシントンで密かに読まれているらしいのだ。

## BIOGRAPHY

1949年

北海道に生まれる。

1971年

慶應義塾大学経済学部を経てNHKに入局。

政治記者として首相官邸、外務省、自民党などを担当する。  
専門は外交・安全保障。

1987~91年

ワシントン特派員となり、ホワイトハウス、国防総省、国務省を担当し、日米の同盟関係を中心でワシントン・レポートを手がける。  
湾岸戦争時にはブッシュ41代大統領と最前線に。

1994年

ハーバード大学CFIA国際問題研究所へ招聘されシニア・フェローをつとめる。

1995~97年

ドイツのボン支局長としてベルリンの壁崩壊後のドイツを取材する。

1997~2005年

ワシントン支局長をつとめる。  
2001年9月11日の同時多発テロ事件では24時間連続中継を11日間にわたって担当する。

2005年6月末

NHKから独立。  
外交ジャーナリスト・作家として著作活動を行う。

2006年3月

インテリジェンス小説『ウルトラ・ダラー』を出版する。

ブッシュ大統領に単独インタビューをする。  
『外交の瞬間 71年・ニクソン機密テープが語る米中接近』(NHK)より。

ホワイトハウスの極秘録音テープをスクープ取材する。『決定の瞬間 記録されたいたキューバ危機』(NHK)より。



NHKを退職した現在も、ワシントン郊外に住む。日本にいるときはつまり“旅行中”。

「情報というか諜報というか、そういう世界は戦後50年、この日本には、ほとんど存在していませんでした。それは周知のことです。個人としては、一流のインテリジェンス・オフィサーと呼ぶべき優れた外交官は、80年代くらいまでは日本にも存在していましたが、組織としては、存在していませんでした。組織

量の情報が流れ込んでいる。手嶋が言いたいのは、今まではその情報の海から、意味のある情報を選り分け、つなぎ合わせ、そこに浮かび上がる時代の真相を読み解く知性を、少なくとも日本の政府は必要としているなかつたということなのだろう。日本は軍事力だけではなく、その知性もアメリカに依存

一、そのための法律が存在しないのですから。でも、必要は発明の母といいます。もしそれが必要だったら、日本にもあつたはずなんです。つまり、それがなくても日本は生きることが出来た。だから存在しなかつたのではないでしょうか。言葉を換えて言えば、情報を探し、判断を下す政治的なリーダーシップが必要としなかつた。けれど、では今後の50年も、インテリジェンス機能を持たずにやつていけると思つている人はどれくらいいるでしょうか。しかし世界第二位の経済大国には、こんなに大量のインテリジェンスが溢れているわけですから」

確かに、日本には世界中から大量の情報が流れ込んでいる。手嶋が言いたいのは、今まではその情報の海から、意味のある情報を選り分け、つなぎ合わせ、そこに浮かび上がる時代の真相を読み解く知性を、少なくとも日本の政府は必要としているなかつたということなのだろう。日本は軍事力だけではなく、その知性もアメリカに依存



『ウルトラ・ダラー』の宣伝も兼ねてJ-WAVE「JAM THE WORLD」に生出演。

## 経済大国は宿命的に、情報大国でもある。

精巧な偽ドル札も、実はその巨大な構図の中ではひとつのかみにすぎない。その向こう側に姿を現すのは、東アジアにおけるパワー・バランスを巡る、アメリカと中国という巨大な怪物同士の、熾烈な駆け引きなのだが……。

ステイブンという英國の諜報部員が、東京を舞台に活躍するのには、そうした方が、日本の読者が喜ぶからではない。東京という情報の海を、彼のように見事に泳いでいる人間が、現実に存在しているのだ。もちろんそれは、必ずしも栗色の髪をした、日本女性に愛される外国の諜報部員である必要はない。黒い髪のNHK海外支局長であつてもいいわけで。はつきり言えば、ステイブンのモデル

くべき構図が浮かび上がる。

手嶋の少年期には、ひとつの忘れられない思い出がある。1961年の暮れのある日、小学校から帰ると自宅に見慣れた人物がいた。

「床の間に、男が一人、背中をひんと伸ばして、正座しているんですね。その当時、私たち家族は、北海道の空知に住んでいました。父親は炭坑を経営していました。その関係で、家にはほんとうにいろんな人達が訪ねてきて。三笠宮がいらしたことともあれば、右翼の大立者と言われた、あの児玉謙士夫が来たこともある。母親は剛胆な人だつたし、そういうことにも慣れていたんですけど、その母を立派に育てたのです。お母さん、お母さん、お母さん……」

『ウルトラ・ダラー』という作品の面白さは、そのインテリジェンスの何たるかを、小説の構造そのものに組み込んでいるところにある。読者はこの本を読み進めるうちに、世界の真相を読み解く作業を追体験できるように構成されているのだ。あたかもインテリジェンス・オフィサー、すなわち情報分析官になつた気分で、手嶋が巧妙に配置した情報の断片をつなぎ合わせていくと、そこに世界の驚くべき構図が浮かび上がる。

は、手嶋自身に違いない。ジャーナリストとスパイは、鏡に映した像のよう似ている。情報収集とその分析が、仕事の大半なのだ。極端に言えば、違います。スパイは、アウトプットの指向性でしかない。ジャーナリストはそれを、世界に向けて高らかに語る。スパイはひつそりと、ごく限られた対象の耳元で囁くというわけだ。

それに何より、手嶋にはある小説で、実際にスパイとして登場した「過去」がある。高村薫の事実上のデビュー作『リビエラを撃て』に登場する英國諜報部員、手島修三のモデルは、つまり彼なのだ。手嶋は経歴から言つても、十分にその資質を備えている。

### 給料を受け取らなかつた。

初めてノーザンファーム（北海道早来町）を訪れたのは  
30年前。まだ20代半ばだった。



## 帰るべき場所があるから、 世界で戦える。

て、じつと座つてました。ようやく父親が帰宅して、対面したのですが、僕はその様子を障子に穴を開けて見ていました。その人は上着を脱ぎ、晒の腹巻きを解いて、巻紙の手紙を出して父に渡しました。父はそれを黙つて読み終えると、「わかりました」と一言、手紙をストーブにくべて燃やしていました。父を見て『それじゃ、働けんかもしれんよ』と。つまり、炭坑

では働けないと言っていた。父は宗谷岬に近い天塩にも関係する炭坑を持っていて、明日の1番列車でそこへ逃がしてやると言うんです。そのやりとりを見て、僕には確信するところがあった。何日か前の新聞の一面に、日本を震撼させた事件が載っていたんです

それは、破防法適用の第一号となつた、三無事件とか国史会事件と呼ばれる、戦後最大のクーデタ一未遂事件だった。自衛隊の現役



ノーザンファームの厩舎にて。日本の競馬史に残る名馬が、種馬や駒馬としてそこにいた。

隊員も巻き込んだと噂されるこの大事件の首謀者たちは、一齊に検挙されたのだが、その網の目を潜つて逃げてきた人物が、父親の前に座っている。そう手嶋少年は、直感したのだった。

【警察庁公安】で言えば、最大の事件の逃亡・<sup>ヒヤウ</sup>帮助。父のしようとしていたことは、犯罪です。さすがの母も父と激しく言い争つてしましました。露見すれば、父親も逮捕されるわけです。でも、父は頑として

言うことを聞かなかつた。父親は右翼でもなんでもありませんでしたけれど、気性から言つて、友人に頼まれたんだと思います。お金や着るものを持たせ、密かに手塩に逃がしたんです」

いつか機会があれば、この出来事をノンフィクションとして書いてみたいと手嶋は言う。冒頭はもちろん、手嶋少年の目から見た、父親と男とのやりとりだ。2人の男の様子から、事の真相を見抜いた眼力もさることながら、剛胆なはずの母親ですら不安を隠せなかつたこの一件を、手嶋は小学生にして、終始冷静な視線で観察していたらしい。障子に穴を開ける指の話を淡々とした。それは彼がジヤーナリストとして身につけた職業的態度なのか、それとも少年時代から感情の起伏を表面に見せない人間だったのか。

「家族から呆れられるくらい、僕は自分自身のことに関心がないんです。自意識が欠落してる」

手嶋はそう言う。けれど、それには、手嶋が感情を持たない人間であります。自意識を意味するわけではないだろう。むしろ、強い感情を、腹の底にしまって行動するタイプの人間なのではないか。

慶應大学を卒業して、N HKに就職した当時、彼は何ヵ月間も給料を受け取らなかつたという。も

ちろん彼なりに理由がある。

「会社に入れば、上司なる人ができて、その人にあれをやれ、これをおやれと言われますよね。それが嫌だった。安い給料で、人のいいなりの仕事なんてしたくなかったんです。実を言うと、僕は学生時代に相場を張つていて、一生に一度あるかないかという、パートエクトな勝ち方をした。70年代のオイルショック前後に、アラビア石油の株を底で買って、天井で売り抜けたんです。すべてが終わって儲けたお金をテーブルに積んでもらつたら、山になつた。証券会社の人が、記念にしたいと写真を撮つていました。まあそういうわけでした。入社当時はかなりのお金を持っていました。それで、そんなことも出来たんですけどね」

この給料不受給事件（？）は管理職の責任問題に発展しかねない様相を呈するに及び、上司の懇願によつて終わりを告げる。もとより、誰かを困らせるためにしたことはなかつた。

「まあ、そういうことがあり、NHK側も様子がだいぶわかつたらしくて、あんまりうるさいことを言わなくなつたんです（笑）。それでもますます、自由にやらせてもらつた。かくして組織のあぶれ者になつたわけです」

はみ出し者とはいゝ、不良社員になつたわけではないのだろう。組織の一匹狼にはなつても、優れた仕事をしたことは想像に難くな

成長していく。  
そして87年、38歳の時にNHKワシントン特派員となり、ホワイトハウス、国防総省、国務省の取材に取り組むことになる。

## ワシントン支局といふ名の、地獄と天国。

「そんな格好のいい話じゃありません。ある日突然、ワシントンへ送られたんです。何の準備もしてひとりホワイトハウスへ出かけたて、何もできやしません。その頃、ホワイトハウスで有名なヘレン・トマスというUPIのチーフ・コレスピンドレントがいました。記者会見のとき最初に大統領に質問する人です。この人はいつもホワイトハウス一番乗りで、朝の6時にはもう来てる。ある朝、僕がホワイトハウスに行くと、このオバサンがいたんです。この街で途方に暮れてると告白したら、男気のある人でね。『何を知りたいんだ』って聞く。『近く日米首脳会談がある。それがいつか知りたい』って言うと、ぱつと電話を取り上げて、国家安全保障会議の次席補佐官のデスクに、直接電話をかけた。アメリカのエリートは朝早いから、相手も在席している。で、『ハレンだけど、次の日米首脳会談はいつ？』つてすぐに聞いてくれたんです。まあ、そんな日程なんて国際的には何のニュースバリューもない。でも、日本では



長さ800mの巨大な坂路。競走馬の生産から調教までが、世界最高水準で行われる。



吉田が手嶋を歓迎して、仲間達を集めてくれた。彼が帰るべき場所が、ここにあった。



ノーザンファーム代表の吉田勝巳(左)とは、30年来の友だ。

い。そここのところは、なぜか語つてくれないので、後に彼が制作するドキュメンタリー番組のクオリティの高さだけを見ても断言できる。政治部記者となつた彼は、総理官邸、外務省、自民党などの担当となり、外交と安全保障を専門とするジャーナリストへと

ニュースになる。そうした小手先のネタで、食いつないでました。

惨めでした」

そんな日々を送っていた手嶋の元に、ある日ひとりの英國紳士が電話をかけてきた。それはジャーナリスト手嶋龍一にとって、砂漠で突如出会ったオアシスだった。

「その人に会って、ああそうかと思いました。ワシントン赴任の一年前、英國産のウイスキーの関税問題で手助けをしたことがある。その報告を聞いた英國大使はその時、いつかこの借りは返すと言つてくれました。目の前にいる人物は、その言葉が真実だつたことの証だつた。超一流のニュースソースでした。あとは芋蔓式ですから。僕のワシントン取材はその日から始まつたと言つていい」

こうして手嶋は、ワシントンでの足場を固めていく。ボン支局長を経て、ワシントン支局長となつてふたたびこの政治都市に戻つたのは97年のことだつた。

その経験から見ても、彼がNHKという組織の「あぶれ者」だつたという話は、にわかには信じられない。ワシントン支局と言えば政治部記者の、憧れの的ではないのだろうか。

「任地がロンドンとか、ニューヨークならそうかもしれません。が、

ワシントンは、仕事だけが過酷で、政治部記者の、憧れの的ではない

豊かなナイトライフが一切ないんです。それから何よりも、本当の取材は、自宅でやらざるを得ない街なんです。特殊な小さなコミュニティですから、パブリックなレストランだと、僕が誰といてとい

うのを見られてしまう。それで、一週間後に大きなニュースが出来ば、もうニュースソースがわかつてしましますよね。だから、本当に重要な取材は、相手の家に招かれ、自分の家に招いてという、プライベートな空間にならざるを得ない。家族を巻き込みますよね。だから、僕はいまだに、精神的に家族には非常な負い目がある。非母国語で記憶ができる容量は、限られていています。天才是知りませんよ。だから、ちょっと失礼みたいにな

うとを言つて、僕はトイレに駆け込んで、忘れちゃうと困るので、トイレットペーパーにずっとメモしてつていうようなことが日常生活だつたんです」

しかも、そうやって苦労して会っている相手の名は、自分の所属する組織にすら明らかにすることができない。

「そういう取材の費用は、基本的にはすべて自腹です。いちばん重要なのは、まさにインテリジェンスと関わる話ですけど、自分が誰と



## 鍵は、世界との競争に、本気で挑めるか、だ。

会つているということは、領収書に書けるわけがない。CIAの誰かと会つてなんてね。いわゆる機密費の使途をめぐる立派なルルなどありませんし。費用はすべて自分持ちです。そんなこと相手には言えませんよね。だからたぶん、ニュースソースの側は、費用はNHK持ちだと思ってる方も多かつたと思います。いや、お金を払うのは構わない。でも、そういう極秘取材についての理解というものがそもそも組織内に存在しない。だから、ワシントンは最悪の場所なんですよ（笑）。僕の同期は局長として数多くの部下を抱えているのに、ワシントン支局は自分も入れて、総勢5名ですから（笑）。ただ、僕の世代ではワシントン支局長というのが、現役として取材現場で仕事のできる唯一のポジションなんです。だから、僕にとっては意味のあるポストだつた。でも一般的には、NHKのワシントン支局長をやりたいて手を挙げる人は、たぶん誰もいません。日本で嫌われている人、できれば帰つてもらいたくない人と、そういう人がすつといる（笑）。

僕は結局8年間やりました。特派員時代を合わせると、12年間、ワシントンで記者をしたことになります。まあ今も懲りずに、そこに住んでいるわけですね（笑）」

彼の話は、いわゆる自嘲と通すきわどさで回避した、ジョン・F・ケネディとフルシチヨフとの間の息詰まるやりとりを、徹底的な事実の検証の上に再構成した『決定の瞬間』記録されたいた『外交の瞬間』周恩来とニクリンによる71年の米中接近の裏舞台を描いた『外交の瞬間』71年・ニクリン機密テープが語る米中接近など、それは枚挙にいとまがない。ちなみに、このニクリン機密テープはウォーターゲート事件の布石となるものなのだが、そこには明らかにされているのは、アメリカと中国が、本音の部分で日本の軍事的暴走の抑止だということが、アメリカの最高権力者の口から赤裸々に語られるのだ。

極めつきは、アメリカ軍が、アフガン戦争以来、キューバの一角にあるグアンタナモ基地に拘留している、イスラム教徒を丹念に取材した『カリブの囚われ人たち』。自由の国アメリカが、テロとの戦争という名の下に、いかなる不正義をしているのか、他者の自由や尊厳をいかに踏みにじつているか、それが現在の世界の明らかな不安定要因になつてゐるという現実を、白日の下に晒したドキュメンタリーだ。

ればどういう風当たりがあるか。

想像するだにオソロシイが、彼はちつとも気にかける様子がない。

「それはもちろん、ホワイトハウ

スは怒りますよね、あんなに親切

にしてやつたのにつて（笑）。僕

たちの仕事は、まさにそういう獣

道をずっと歩いているようなそ

ういう仕事だと思う。その番組を

作つたのは9・11の後でした。そ

の囚われ人の中に、本物のテロリ

ストがいないということは誰も断

言できないわけです。その囚われ

人を野に放つたときに、第二の9

・11事件を起こすかもしれません

よね。そういう可能性があるにも

かかわらず、お前はそれを批判で

きるのかと。それでもなお、

アメリカの正義はここで傷ついて

ると、僕はその番組で言わなけれ

ばならなかつた。そして、その言

葉の責任は、いつでも取るつもり

で生きてきました。いや、そういう

う僕の意見なんて、ゴミのような

現実が、圧倒的な映像によつてと

らえられていた。その映像の積み

重ねの果てに、結論部分があるわ

けですよ。当時、アメリカのメ

ディアも、BBCも、そういう番

組を作つていなかつた

NHKの職員としても、一人の

ジャーナリストとしても、手嶋は

まさに歴史を歩んでいたのだ。そ

のことをあくまでも静かに、9・1

1のテロとともに続くアメリカの

混乱を伝え続けたのと同じ、あの

もの柔らかな口調で語る。手嶋は

そういう人物だった。

けれど、それにしても、彼だつ

て人間なのだ。心が挫けたり、逃げ腰になつたりすることは、一度もなかつたのだろうか。

「組織の中で生き残ろうとか、自分を守りたいとか、そういう足枷が、人間だから誰でもある。僕はたまたまそういう足枷が、比較的小少なかつたというだけのことかもしませんね。いつでも辞められるように、住宅ローンは一切借りない（笑）、そういうこともしてからこそ、僕はどんなリスクでも背負うことができた。それがつまり、吉田勝巳さんのノーザンフームだったのです」

## 戦後日本社会のくびきを、 自力で外した男たち。

本当のことと言えば、取材の間

ずっと、折に触れて手嶋は、ノーザンファームと、その代表である

吉田勝巳について語ってくれてい

た。グローバルなビジネスこそが

明日を創る、という今回の我々の

テーマにぴったりなのは、自分な

どではなく、吉田勝巳と彼の2人

の兄弟たち、そして彼の父親であ

る吉田善哉だ。彼らが北の大地で

成し遂げ、そして今も成し遂げつ

つある仕事こそが、本当の意味で

のグローバルな仕事なのだと。

「勝巳さんのお父さんが始めた頃

は、あらゆる意味で厳しい条件だ

った。お金もそれほどない、土地

もまだ狭い、土壤も悪い。にもか

かわらず、彼はここに自分の帝国

を築こうとした。生産牧場をする

なら、もつと条件のいい土地はあるが、そういう土地の上にはび

るところと、ほとんど同じ土壤なのです。だから僕たちの間には、説明がまったくしない。まあ、そんな話をしたことは、一度もありませんが（笑）

手嶋はそう語る。逆説的な話だ

けれど、グローバルスタンダード

には、単純に世界の真似をしてい

たら、絶対に達することはできな

いはずだ。世界最強の支配者の競争力を是とし、そこで勝つためのオリジナリティというようなものが、ノーザン

ファームの大地のすべてから、陽炎のよう立ち上つていた。

ちなみに、手嶋とノーザンファ

ームの間には、現実的な利害関係

は存在していない。そこにあるの

は、手嶋と吉田勝巳との、30年にわたる信頼関係のみだ。自分に何

かあつたら、吉田は10年でもこ

に自分を匿うだろうと、手嶋は當

たり前のよう言つて笑つた。

どうしてそこまで手嶋を応援す

るのか。吉田に尋ねると、彼はそ

の質問にさも不思議そうに、たつ

た一言で答えを出した。

「そりや、友達だからですよ」

見えるはずです。それはあきらかに吉田勝巳という人が、グローバルビジネスというか、世界との競争の中で、戦後の日本のくびきを、自力で乗り越えた人物だからなんですよ。それは、僕がインテリジエンス小説の中でやろうとしていることと、ほとんど同じ土壤なのですよ。だから僕たちの間には、説明がまったくしない。まあ、そんな話をしたことは、一度もありませんが（笑）

手嶋はそう語る。逆説的な話だ

けれど、グローバルスタンダード

には、単純に世界の真似をしてい

たら、絶対に達することはできな

いはずだ。世界最強の支配者の競

争力を是とし、そこで勝つためのオリジナリティというようなものが、ノーザン

ファームの大地のすべてから、陽

炎のよう立ち上つていた。

ちなみに、手嶋とノーザンファ

ームの間には、現実的な利害関係

は存在していない。そこにあるの

は、手嶋と吉田勝巳との、30年に

わたる信頼関係のみだ。自分に何

かあつたら、吉田は10年でもこ

に自分を匿うだろうと、手嶋は當

たり前のよう言つて笑つた。

どうしてそこまで手嶋を応援す

るのか。吉田に尋ねると、彼はそ

の質問にさも不思議そうに、たつ

た一言で答えを出した。

「そりや、友達だからですよ」

ず戦うことができるのだ。それはあきらかに吉田勝巳という人が、グローバルビジネスというか、世界との競争の中で、戦後の日本のくびきを、自力で乗り越えた人物だからなんですよ。だから僕たちの間には、説明がまったくしない。まあ、そんな話をしたことは、一度もありませんが（笑）

手嶋はそう語る。逆説的な話だ

けれど、グローバルスタンダード

には、単純に世界の真似をしてい

たら、絶対に達することはできな

いはずだ。世界最強の支配者の競

争力を是とし、そこで勝つためのオリジナリティというようなものが、ノーザン

ファームの大地のすべてから、陽

炎のよう立ち上つていた。

ちなみに、手嶋とノーザンファ

ームの間には、現実的な利害関係

は存在していない。そこにあるの

は、手嶋と吉田勝巳との、30年に

わたる信頼関係のみだ。自分に何

かあつたら、吉田は10年でもこ

に自分を匿うだろうと、手嶋は當

たり前のよう言つて笑つた。

どうしてそこまで手嶋を応援す

るのか。吉田に尋ねると、彼はそ

の質問にさも不思議そうに、たつ

た一言で答えを出した。

「そりや、友達だからですよ」



**ウルトラ・ダラー**  
ダブリンに新種の偽札現る!  
発売から1カ月余りで20万部  
を突破する、話題騒然のイン  
テリジェンス小説。  
新潮社 ¥1575